

## 自由論題 7 「資本市場・金融市場」

### 報告 3

上原健太郎（京都大学大学院）

「ブルネイ・ダルサラームにおけるイスラーム金融の展開とその動態——経済発展戦略の観点から」

#### Development and Movement of Islamic Finance in Brunei Darussalam: From the Perspective of Economic Development Strategy

本発表の目的は、東南アジアの産油国であるブルネイ・ダルサラームで展開されているイスラーム金融の動態について、銀行部門と資本市場に着目して明らかにすることである。ブルネイでは、1990年代初頭から現在に至るまで政府主導によるイスラーム金融システムの構築が積極的に行われてきた。その結果、イスラーム金融機関の資産が銀行部門全体の50%以上を占めるなど、同国の金融システムに欠かせない存在となっている。

本発表ではまず、同国の銀行部門の中で最大資産を有するブルネイ・ダルサラーム・イスラーム銀行（Bank Islam Brunei Darussalam, BIBD）によるセクター別・契約手法別貸出動向に着目する。同行のセクター別の貸出は、2010年時点で個人消費目的が大きい割合を占めていたものの、近年、石油・天然ガス部門・居住用資産目的が大きい割合を占めるようになってきた。この点について、政府による経済政策との関係から考察を行う。

また同行による貸出の大部分は、2000年代までバイウ・ビサマン・アージル（bay' bi-thaman 'ajil）という契約手法によって行われていた。これは、イスラーム金融において禁止されているリバー（いわゆる利子）を回避するために開発された契約手法で、具体的に「延べ払いによる売買」を意味する。しかし、2010年代以降、この契約手法の割合は低下し、代わりに「三者間の売買取引を用いた現金の調達手法」を意味するタワッルク（tawarruq）という手法が多く用いられるようになった。本発表では、タワッルクがバイウ・ビサマン・アージルに置き換わるようになった背景として、シャリーア・コンプライアンスの視点から説明を行う。

次に、スクーク（いわゆるイスラーム債券）の発行についても考察を行う。同国では、2006年から現在に至るまで毎年、スクークの発行が行われており、現在はブルネイ通貨金融庁がその役割を担っている。本発表では、その案件と主幹事について明らかにし、同国の実体経済との関係を考察する